

1970年代以降の建築家の言説にみる建築の歴史に関する認識

Considerations of Historical Architecture and Its Terminology by Contemporary Architects Based on a Review of the Japanese Architectural Press since the 1970s

奥山研究室 11M30144 北澤 悠樹 (KITAZAWA, Yuki)

Keywords：建築の歴史、歴史的ターム、着目根拠、建築専門誌

historical architecture and its terminology, historical term, reason of focus, architectural press

1. 序

1.1 研究の背景と目的 1960年代中葉においてA. ロッシやR. ヴェンチュリ等は、建築や都市の歴史への洞察¹⁾を思想の基盤に据えることで、モダニズムを相対化しうる新たな建築論を展開した。このように、建築家²⁾が過去の建築やその思想をどのように位置づけるかは、時代を切り拓く建築論を構想する上で重要なテーマであると考えられる。しかし近年、建築家の歴史に対する意識の希薄化が指摘されており³⁾、こうした状況において、建築に対する思考が歴史的パースペクティブの中でどのように位置づけられてきたかを把握することは、現代の建築的状況を捉える上で意義があるものと考えられる。そこで本研究では、モダニズムが相対化されたと考えられる1970年代以降の主要な建築専門誌⁴⁾において発表された建築家の論説を資料とし、その内容を検討することで、建築の歴史に関する建築家の認識の一端を明らかにすることを目的とする。

1.2 研究の概要と資料対象 建築専門誌では建築の歴史に関連する用語⁵⁾(以下、歴史的ターム)がタイトルに含まれる記事⁶⁾(以下、歴史関連記事)が掲載されてきた。そうした記事

を構成する建築家の論説からは、なぜ歴史的タームに着目したか(以下、着目根拠)に関する言説を抽出することができ(図1)、これらからは建築デザインや建築論を構想するうえで、建築家が建築の歴史をどのように認識したかを読み取ることができる。そこで、2章では歴史関連記事において題材とされる歴史的タームを、3章では歴史関連記事を構成する建築家の論説における着目根拠をそれぞれ検討したうえで、4章でそれらの内容および関連性を通時的に比較検討する。本研究では、231の歴史関連記事とそれらに付随する154の論説を資料対象としている(図2)。また、これらの論説を執筆する建築家の専門分野を、建築や都市などの具体的な設計および計画を通して表現を行うことに比重をおく〔設計分野〕と建築の意匠に関する文筆活動で表現を行うことに比重をおく〔言論分野〕とに整理した(表1)。

2. 建築専門誌における歴史関連記事の内容

2.1 歴史的タームの内容 歴史関連記事のタイトルから歴史的タームを抽出し、その内容を整理したものが図3である。歴史的タームは【人物】【建築・都市】【思潮】の3つの項目に分



図1. 研究の流れ

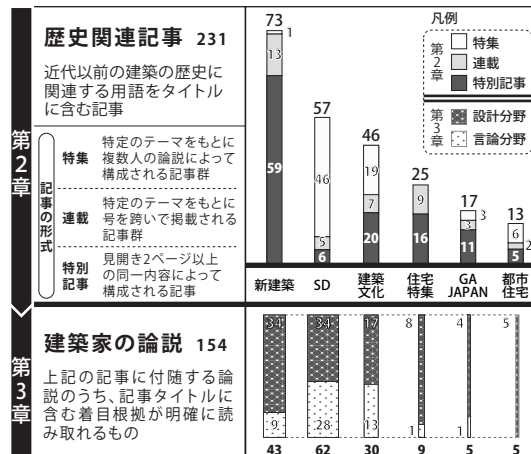


図2. 雑誌別対象資料

表1. 筆者の専門分野

【設計分野】 102	
具体的な設計および計画を通して表現を行うことに比重をおく分野	
建築設計者 (内2名海外)	93
都市計画家	3
構造物家	3
環境・設備家	2
家具デザイナー	1
【言論分野】 52	
建築の意匠に関する文筆活動で表現を行うことに比重をおく分野	
建築史家	42
建築評論家 (内1名海外)	6
美術評論家	4

3.1 着目根拠

建築家の論説から着目根拠を抽出し、通読したところ、それらの内容が多岐にわたっていたため、KJ法⁸⁾によって内容を相互に比較検討した。その結果、着目根拠は《現代建築・都市を批評》《建築をつくる方法を抽出》《建築における概念を明確化》(以下、それぞれ《現代を批評》《方法を抽出》《概念を明確化》)の3つの大枠で捉えることができた(図5)。《現代を批評》は、現代における建築界全体の潮流や現代都市の問題などを理解する〈現代性を把握〉、それらの時流から異なる流れを指向する〈時流から逸脱〉、および建築家の思想や特定の作家による作品群の特徴などを批評する〈個別的な批評〉を

3.2 着目根拠と歴史的タームの対応関係

着目根拠と歴史的タームの対応関係について筆者の専門分野毎に示したものが図6である。まず、〔設計分野〕の検討を行う。《現代を批評》では、歴史的タームにおける【思潮】、時代区分における〔モダニズム以降〕が多くみられた。このことは、現代の建築・都市の基盤ともいえるモダニズム期から戦後にかけての建築的思想および主義に着目することで、現代建築・都市を相対化する傾向があると考えられる。次に、《方法を抽出》では歴史的タームにおいて【人物】が多くみられた。このことは、特定の建築家という枠組みを通して、建築家に固有の設計姿勢や空間の形式などを抽出する傾向があると考えられる。さらに、時代区分では〔モダニズム以前〕と〔モダニズム以降〕が同程度みられたことから、建築をつくる方法を抽出する際には歴史に対する時間的な射程の長短によらない傾向があるといえる。また、《概念を明確化》では歴史的タームにおける【建築・都市】が多くみられた。このことは、建築における概念を明確化するために、具

図4. 歴史関連記事の内容

体的な建築や都市に着目する傾向があると考えられる。このように〔設計分野〕では、着目根拠毎に異なる歴史的タームとの関連性があることから、目的に応じて着目する題材を選択する柔軟な態度をとる傾向があるといえる。一方、〔言論分野〕では、いずれも【人物】が大きな割合を占めていることから、一貫して建築家を中心に取り上げるという傾向があるといえる。

4. 建築の歴史に関する建築家の認識の変遷

本章では、これまでに位置づけた歴史関連記事における歴史的タームの内容、時代区分と場所区分、建築家の論説における着目根拠、筆者の専門分野を通時的に比較することで、建築の歴史に関する建築家の認識の変遷を検討する（図7）。

まず、歴史関連記事の数の推移をみると、70年代から80年代前半にかけて増加傾向にあり、80年代後半で減少するものの、そこから90年代後半にかけて再び増加傾向となり、近年では極端に減少していることが分かった。また、建築家の論説の数も同様の傾向を示すことから、80年代前半と90年代後半では、建築界および建築家の双方において建築の歴史に対する関心が高まっていたといえる。そこで、80年代前半と90年代後半を中心に、建築の歴史に関する建築家の認識の変遷を考察する。

80年代前半では、着目根拠における《現代を批評》、筆者の専門分野における〔設計分野〕が多くみられた。このことを、1978年に『ポストモダニズムの建築言語』⁹⁾が発刊されたことと合わせて考察すると、80年代前半では〔設計分野〕を中心

に建築の歴史を通じて現代建築・都市を相対化していた傾向があったと考えられる。加えて、70年代後半から80年代前半にかけて、歴史的タームにおける【建築・都市】が減少し、【思潮】が増加した。またこの期間では、時代区分における[モダニズム以前]が比較的多くみられた。これらのことから、建築界全体で具体的な建築や都市から特定の建築的思想へと関心が推移したとともに、この期間では建築の歴史に関する認識の時間的な射程が長かったといえる。

次に、90年代前半から歴史関連記事の数が多くみられた90年代後半にかけて、歴史的タームでは【人物】が飛躍的に増加し、時代区分では[モダニズム以後]、場所区分では{日本}および{欧米}における"南欧"と"北欧"が比較的多くみられた。このことは、建築界全体において、世紀末や戦後50年の節目に、北欧や戦後日本などのモダニズム期の建築家を整理する作業が行われたことで、建築の歴史に対する関心が一時的に高まったことを示すものと考えられる。

さらに、歴史関連記事の数が減少した近年では、特に着目根拠における《方法を抽出》と筆者の専門分野における〔言論分野〕が減少したことが分かる。このことは、建築界全体の建築の歴史に対する関心が薄まる中で、特に〔言論分野〕の活動が鈍化し、また、建築をつくる方法に対する建築家の関心が薄まったといえる。そうした中で危機意識を抱き、再びモダニズムとの関連において現代建築の潮流を相対化しようとする〔設計分野〕の姿勢を示す内容もみることができた（図7の例V）。

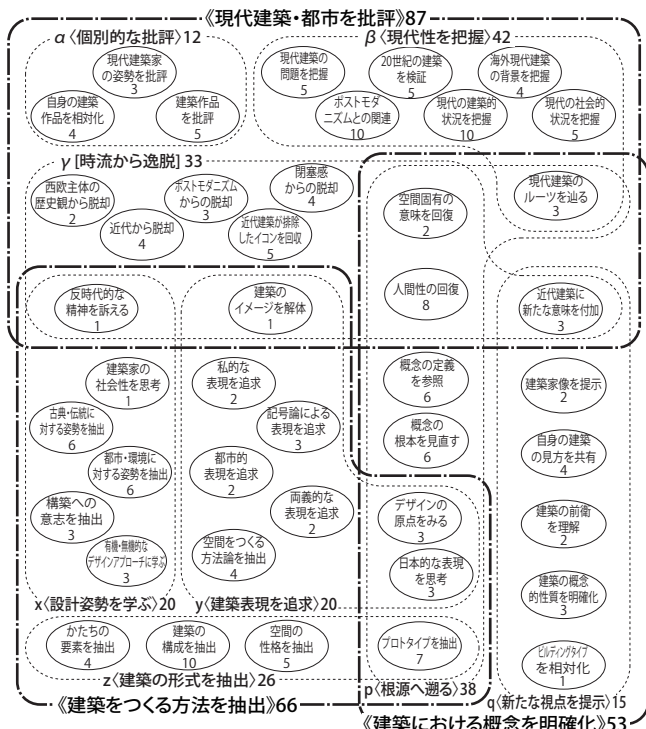


図5. 着目根拠の関係図

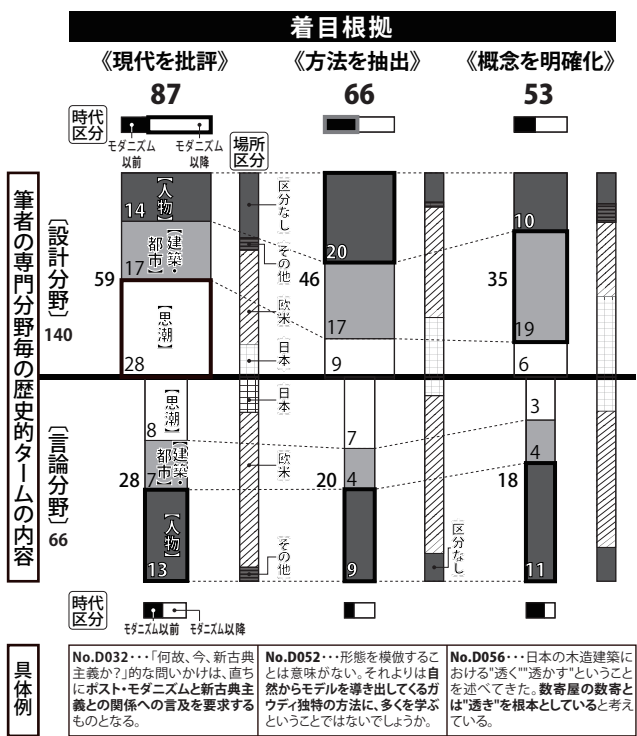


図6. 着目根拠と歴史的タームの関係

以上、1970 年以降の建築専門誌に掲載された歴史関連記事とそれに付随する建築家の論説を対象に、歴史的タームおよび着目根拠の内容とそれらの通時的傾向を検討した。その結果、歴史的タームと着目根拠をそれぞれ 3 つの大枠で整理できた。さらに、それらの対応関係から、建築設計者や都市計画家は、建築の歴史に着目する根拠に応じて取り上げる歴史的な題材を変える一方、建築史家や評論家は、いずれの根拠においても人物を取り上げる傾向を見出した。また、通時的傾向として、70 年代後半から 80 年代前半にかけて、建築界全体の関心が、歴史上の具体的な建築や都市から建築的思想へと推移したとともに、この期間では建築の歴史に関する認識の時間的な射程が長かったことを見出した。そして、90 年代後半において戦後 50 年や 20 世紀という時代の節目に際して、建築の歴史に対する建築家の関心が一時的に高まったのち、2000 年代後半から歴

- 註 1) A. ロッシは、『都市の建築』(大島哲哉、福田晴虎 共訳、大龍堂書店 1991 年) にてイタリアの歴史的な都市を、また R. ヴェンチュリは、『建築の複合と対立』(松下一之訳、美術出版社、1969 年) にてモダニズムの建築を対象とした洞察を述べている。
- 2) ここでいう建築家は、主に建築作品あるいは建築論をジャーナリズムに発表することによって、建築の表現活動をしている人物とする。
- 3) 歴史に対する意識の薄化は、八束はじめによる『建築文化 No.639 対談 日本モダニズムのハード・コアをめぐる』(彰国社、2000 年) などで指摘されている。
- 4) ここでは主要な建築専門誌として新建築、住宅特集、GAJAPAN、建築文化、SD、及び都市住宅を資料対象としている。
- 5) 本研究ではモダニズムが相対化されたと考える期間に着目しており、ここでの歴史的タームとは 1960 年以前の歴史に関連する用語としている。
- 6) 歴史関連記事はその形式により、特集・連載・特別記事に分類している(図 2)。
- 7) ニコラス・ペヴスナーの『モダン・デザインの展開 モリスからグロピウスまで』(白石博二 訳、みすず書房、1957 年) によると近代様式は 1914 年までに確立したと指摘されていることから、これを境にモダニズム以降にモダニズム以降に分類している。
- 8) 川喜田二郎:『発想法』(中央公論社、1967 年) 内の KJ 法を用いている。
- 9) チャールズ・ジェンクス 著 竹山実 訳:ポストモダニズムの建築言語、エー・アンド・ユ、1978 年



図7 註)表の数字と各バーの高さは、左は歴史関連記事、右は着目根拠の数とその比率によって設定している。